

平成26年度 事業報告書

(平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)

学校法人 東京音楽大学

目 次

第一 法人の概要	
1. 設置する学校等	1
2. 沿革	2
3. 定員、学生・生徒・園児数	2
4. 学校法人役員等	2
5. 教職員数	3
第二 事業の概要	
総括	3
第三 項目別概要	
1. 人事	4
2. 施設整備	4
3. 入試・広報活動	5
4. 大学、大学院	
(1) 学生募集	5
(2) 教育課程	5
(3) 演奏活動	6
(4) 三大学連携事業及びACTプロジェクト	7
(5) 学生支援	7
(6) キャリア支援	8
(7) 国際交流	9
(8) 大学院	10
5. ファカルティ・ディベロップメント (FD)	11
6. 自己点検・評価	12
7. 教員研究費	12
8. 地域連携	12
9. 後援会、校友会等との連携	13
10. 附属図書館	13
11. 附属高等学校	14
12. 附属幼稚園	14
13. 附属音楽教室	14
14. 附属民族音楽研究所	15
15. 財務報告	
(1) 決算の特徴	15
(2) 財務の概要	15

平成26年度 学校法人東京音楽大学 事業報告書

第一 法人の概要

1. 設置する学校等

東京音楽大学

大学院音楽研究科
(博士後期課程)

音楽専攻

大学院音楽研究科
(修士課程)

器楽専攻

鍵盤楽器 弦楽器 管打楽器 室内楽

声楽専攻

独唱 オペラ

作曲指揮専攻

作曲 指揮

音楽教育専攻

音楽教育 音楽学 ソルフェージュ

音楽学部音楽学科

器楽専攻

ピアノ ピアノ演奏家コース
ピアノ演奏家コース・エクセレンス
コンポーザー＝ピアニストコース
ピアノ・創作コース
チェンバロ オルガン
ヴァイオリン ヴィオラ チェロ
コントラバス ハープ
クラシックギター
フルート オーボエ クラリネット
ファゴット サクソフーン
ホルン トランペット トロンボーン
チューバ ユーフォニアム
打楽器

声楽専攻

声楽 声楽演奏家コース

作曲指揮専攻

作曲 (芸術音楽コース)
作曲 (映画・放送音楽コース)
作曲 (ポピュラー・インストゥルメンツコース)
作曲 (ソングライティングコース)
指揮

音楽教育専攻

応用音楽教育コース
実技専修コース

附属図書館

附属高等学校

全日制課程音楽科

声楽専攻 器楽専攻 作曲専攻
音楽総合コース

附属幼稚園

附属音楽教室

附属民族音楽研究所



2. 沿革

明治40年 5月	東洋音楽学校設立（神田区）
大正13年11月	豊島区雑司が谷（現南池袋）に移転
昭和22年 5月	財団法人東洋文化学園と改称
昭和24年 3月	東洋高等学校（音楽科）開設
昭和25年 2月	東洋幼稚園開設
昭和26年 3月	学校法人東洋文化学園認可
昭和29年 2月	東洋音楽短期大学設置認可
昭和38年 2月	東洋音楽大学設置認可
昭和44年 8月	名称変更認可 学校法人東洋文化学園を学校法人東京音楽大学に改称 東洋音楽大学を東京音楽大学に改称 東洋高等学校を東京音楽大学付属高等学校に改称 東洋幼稚園を東京音楽大学付属幼稚園に改称 東洋音楽学校を東京音楽学校に改称
昭和45年 3月	東洋音楽短期大学廃止認可
昭和51年 7月	東京音楽学校廃止認可
平成 5年 3月	東京音楽大学大学院音楽研究科修士課程設置認可
平成25年10月	東京音楽大学大学院音楽研究科音楽専攻博士後期課程設置認可

3. 定員、学生・生徒・園児数（平成26年5月1日現在の人数）

	入学定員	収容定員	入学(園)者	在籍者
大学院音楽研究科博士後期課程	3	—	8	8
大学院音楽研究科修士課程	70	140	78	153
音楽学部音楽学科	310	1,240	353	1,449
付属高等学校音楽科	70	210	83	193
付属幼稚園	—	150	56	134
音楽教室(入室生+オープンシステム受講生)	—	—	25	74

4. 学校法人役員等（平成26年6月1日現在）

役員	理事長	鈴木 勝利			
	理事	野島 稔	佐々木正峰	高祖 敏明	保倉 裕
		佐々木 亮	丸山恵一郎	野本 正平	原山 耕造
	監事	吉田 恭治	福島 啓充		
評議員		野本 正平	西村 朗	大谷 康子	鈴木 信五
(就任順)		釜洞 祐子	菊地 麗子	坂崎 則子	武田 真理
		海老原直美	岡田 敦子	菅原 淳	小六禮次郎
		原山 耕造	稲葉 良太	在間 聡子	小村久米夫
		広上 淳一	鈴木 勝利	丸山恵一郎	
東京音楽大学長		野島 稔			
東京音楽大学副学長		野本 正平	堀 了介		
大学院音楽研究科長		野島 稔			
付属図書館長		坂崎 則子			
付属民族音楽研究所長		池辺晋一郎			
付属高等学校長		野本 正平			
付属幼稚園長		加納 里美			
付属音楽教室長		村上 隆			

5. 教職員数（平成26年5月1日現在）

大学	専任教員 122名	非常勤教員(含助手) 290名	専任職員 72名
大学院		非常勤教員 4名	
附属高校	専任教員 12名	非常勤教員 31名	専任職員 1名
附属幼稚園	専任教員 7名	非常勤教員 9名	専任職員 1名
附属音楽教室		非常勤教員 10名	
附属民族音楽研究所	専任研究員 1名	非常勤教員 3名	

第二 事業の概要

総括

近年、我が国を取り巻く環境は、多方面にわたり大きな変革期を迎えている。少子化、高度情報化社会の中で、本学は都市型音楽大学としてグローバル化を図り、教育研究の質を高め、本学で音楽を学ぶ学生・生徒の意欲の向上と充実感を支援して、進路への意識向上を促進し、教育研究成果をもって地域に貢献、協創するため次のとおり諸施策を展開した。

一方、これらの諸施策をより具現化していくため、新たなキャンパス計画を進めている。

(1) 中期計画として取り組むことが必要な課題

平成27年2月2日、FD研修会をとおして全教職員に公表。

(2) 教育課程(学部)

学部では、学生が自分の学業成績の状況を的確に把握し、それに基づいて適切に履修計画をたて、主体的に学習を進めていくことを目的として、平成27年度以降の入学生からGPA(=Grade Point Average)制度を導入することにした。

GPAとは、履修した科目ごとの5段階評価(秀・優・良・可・不可)を、4から0までの点数GPに置き換えたうえで、履修した科目1単位あたりの成績平均値を求めたものを指し、学修の質を評価する指標となっている。合格した科目だけでなく、不合格や途中放棄した科目もGPA算出対象となるため、学生は履修登録した科目に対して真剣に取り組むことが求められる。

また単位の過剰登録を防ぎ、効果的な学習時間(予習復習を含む自主的な学習時間)を確保するために、履修単位数上限(CAP制)を設けているが、これまでは1年次生から3年次生まで48単位を限度としていたが、平成27年度以降の入学生から、4年次においても60単位を限度と定めた。

また本学では平成22年度の入学生から早期卒業制度を定めている。この制度は器楽専攻に3年以上在学し、卒業要件として本学が定める単位を優秀な成績を以て修得したと認められる者を対象とするが、平成26年度に初めて打楽器の学生1名を認定し、3年次終了で卒業した。

(3) 教育課程(大学院)

大学院においては、専門分野の力をより一層高め、総合的な知見と社会的・実践的能力を獲得して、世界の第一線で活躍する人材を養成するため、「博士後期課程(標準修業年限3年)」を平成26年4月1日に創設した。平成26年度は、初年度ということもあって、入学定員3人に対して5倍の15人が受験し、第一期生として8人が入学した。それぞれが将来の優れた音楽家、音楽教育者又は音楽学研究者を目指して、日夜研究に励んでいる。

また、修士課程においては、アドミッションポリシー等の3ポリシーを策定して公表するとともに、教育研究の改善充実を図るため、研究科委員会の下に作業部会を設けて検討を行い、カリキュラムの改編に反映させた。

(4) キャリア支援

本学の教育目標に沿った考えに基づき、自ら社会と連携できるたくましい音楽家を育成するために、長野県信濃町での実践を通して、コンサートの企画や運営を学ぶ「文化力発信プロジェクト」、ドイツの青少年オーケストラの合宿と演奏旅行に参加して、人間的・音楽的向上を目指す「バイエルン州立青少年オーケストラプロジェクト」、就職のための特訓・基礎講座、各種資格試験等対策説明会、推薦企業説明会、企業見学会を実施した。

第三 項目別概要

1. 人事

(1) 人事計画留意点

学生にとって魅力的で、質の高い教育を提供できる教員を配置することが必要であり、計画的な新陳代謝を念頭に進めたため、今年度、専任教員は若干減少することになった。

人件費削減については喫緊の課題であり、教員数についてはここ10数年来、学生数の減少に対応できておらず、今後の課題となっている。

① 教員について

専任教員：大学部門では122名で前年比2名減、法人全体では2名減。

非常勤教員：大学部門では317名で前年比7名減、法人全体では9名減。

② 職員について

専任職員：大学部門では72名で前年比2名減、法人全体では2名減。

(2) 賞与について

本年度は、本学を取り巻く厳しい環境と今後を見越した経営的見地を踏まえ、全体として支給総額を、声楽、音楽教育担当教員は10%減額、その他は役員を含めて6%減額することとし、個々には評価、貢献度に応じてメリハリをつけた。

(3) 研修会

① 平成26年4月18日

新任教職員研修会（出席者22名）

② 平成26年4月18日、21日

教職員研修会（出席者232名）

講師：鈴木勝利理事長、野島稔学長
原山耕造事務局長

③ 平成26年8月7日、8日

事務職員基礎研修会（若手職員4名参加）

主催：私立大学庶務課長会

於：東京農業大学世田谷キャンパス

④ 平成26年11月10日

SD研修会（出席者73名）

・東京音楽大学の今後について

講師：鈴木勝利理事長

・大学教育の質的転換に向けて

講師：渡辺国彦教授

・職員のあり方について

講師：原山耕造事務局長

⑤ 平成27年2月2日

教職員研修会（FD研修会）

・中期計画にむけての取り組み

講師：鈴木勝利理事長、野島稔学長

2. 施設整備

＜施設整備における東京音楽大学の取組＞

現キャンパスのうちB・C棟および図書館等は老朽化が進み、耐震性や利便性の点で問題が多く、耐震工事を含む大幅な改修または建替えの必要に迫られている。本学は、これらのことを踏まえ、大学施設の抜本的整備を図るべく、具体的計画を進めている。

校舎・校地の有効活用の検討、B館耐震施工の工法・工程・業者選定作業を実施した。また整備計画に基づく各種設備機器の更新工事、トイレのリニューアル等を行った。またランニングコスト・メンテナンスコスト・各委託管理コスト等の見直しを行い、外注業者の変更など経費削減を行った。

その他では、経年変化や震災の影響等と思われる各設備の修理に対応した。

また、避難訓練を実施し、防災倉庫の整理と防災用品の充実を図った。

＜主な施設の改修工事＞

① B館5階女子トイレリニューアル工事

② 附属高校トイレ改修工事

③ 図書館非常口及び書庫屋根改修工事

④ 学内LAN関連更新工事

- ⑤ 学生寮厨房機器新工事
- ⑥ 外部委託業務の見直し（警備会社の変更）

3. 入試・広報活動

本学及び付属高等学校への入学志願者数の増加を図るため、実技の優秀な学生の獲得や、各種音楽コンクールへの参加学生・生徒を支援した。

広報活動では、昨年から開始した6月のオープンキャンパス、11月の芸術祭期間中の個別進学相談会の他に、10月から12月にかけてレッスン・授業見学会など、受験生が大学に来校するきっかけになるイベントの回数を増やした。

4. 大学、大学院

(1) 学生募集

① 夏期受験講習会	講習期間 平成26年7月26日～7月30日	受講者数	407名
② 指定校推薦入学試験	試験期間 平成26年11月16日	受験者数	21名
③ 弦管打楽器優秀者選抜試験	試験期間 平成26年11月16日	受験者数	14名
④ ピアノ演奏家コース・エクセレンス選抜入学試験	試験期間 平成26年12月7日	受験者数	1名
⑤ 冬期受験講習会	講習期間 平成26年12月23日～12月27日	受講者数	443名
⑥ 平成27年度大学入試センター試験	試験期間 平成27年1月17日～1月18日 目白大学と共同実施	受験者数	750名
⑦ 平成27年度一般入学者選抜試験	試験期間 平成27年2月16日～2月20日	志願者数 受験者数 合格者数 入学者数	414名 409名 318名 238名
⑧ 平成27年度＜声楽・器楽＞特別選抜試験	試験期間 平成27年3月22日～3月24日	志願者数 受験者数 合格者数 入学者数	28名 25名 18名 13名

(2) 教育課程

① 教職課程

教職課程担当教員と連携し、学生指導の改善、向上を図った。教育実習、介護等体験については事前指導を重ね、ガイダンスや指導法の授業において学外講師を招き、実践的な指導を行った。介護等体験の事前指導は、東京都社会福祉協議会において、東京都のモデルケースとして報告されるなど注目されている。また、実習校を教職担当教員が視察することにより、連携を強め、教育内容の向上を目指した。

教員採用試験については年3回の特別講座を行い、1次合格者に対しては、面接等2次試験対策としてきめ細かな指導を行い成果をあげた。

また教員採用試験と介護等体験の実際の体験談を、直接学生に聞かせることにより、学生同士、また卒業生との交流を通して、教職への理解を深める一助とした。

② 上智大学との単位互換協定に基づく学生交流

上智大学の学生11名が、本学の授業17講座(40単位)を受講した。また本学の学生17名が、上智大学の春学期17科目(34単位)を、8名が秋学期8科目(16単位)をそれぞれ受講した。

(3) 演奏活動

① 演奏会

・ 毎年開催している本学主催演奏会8件の他に、特別演奏会として『イリーナ・ザイトリン ヴァイオリンリサイタル』『東京音楽大学&京都市立芸術大学 吹奏楽交流演奏会』『東京音楽大学が奏でる 童話の森 ピアノコンサート』『エリソ・ヴィルサラーゼピアノリサイタル&公開マスタークラス』『シンフォニックウインドアンサンブルB♭ブラス特別演奏会』、特別講座として『マキシム・ヴェンゲーロフ ヴァイオリン公開マスタークラス』を開催し、世界的に活躍している演奏家との交流や他大学との交流を図った他、学生の演奏する機会も増えて学生の向上心を刺激した。

・ 外部団体主催の依頼演奏会では、シンフォニック ウインド アンサンブルが東京商工会議所・豊島支部青年部主催『としまおやこコンサート』で演奏、シンフォニーオーケストラがセルバンデス文化センター、スペイン大使館主催『日本スペイン交流400周年記念事業-東京音楽大学シンフォニーオーケストラ演奏会』、府中の森芸術劇場主催『オーケストラの扉Ⅲ』、東総文化会館主催『東総の第九2014』で演奏し好評を得た。また合唱団もNHK交響楽団の定期公演、日本フィルハーモニー交響楽団名曲コンサートに出演し、高い評価を受けた。



弦楽アンサンブル



日本スペイン交流400周年記念コンサート

② 2014年度第13回 東京音楽大学コンクール

平成26年度は、声楽部門とピアノ部門を対象として実施した。それぞれの部門で5人の入賞者を選び、第1位から第3位に賞金と賞状、入賞者には賞状を渡した。

声楽部門の第1位は2名が同点だったため決選投票を行ったが、審査員からの評価はそれぞれが高く、将来を期待された。

③ 招聘者による公開レッスン等

学生が本学のキャンパスで、世界の一流の音楽家からレッスンが受けられるように、招聘者による個人レッスン・公開レッスンを行った。平成26年度は20名を招聘した。具体的な目的は以下の3点である。

- ・ 西洋音楽発祥の地で活躍中の演奏家等を招聘することにより、文化的背景の理解と実技とをリンクさせた教育を行う。
- ・ 学内で通常行われているレッスン・授業の検証につなげ、本学の教員自身が世界に通用する指導プログラムの構想を練る動機付けにする等、教員にとってのFDとする。
- ・ 一流の演奏家と学生との交流を促し、音楽を通じた国際的ネットワークの形成をする。



エリソ・ヴィルサラゼ氏



マキシム・ヴェンゲーロフ氏

(4) 三大学連携事業及びACTプロジェクト

① 三大学連携事業

平成21年度選定文部科学省「大学教育充実のための戦略的三大学連携支援プログラム」の支援期間が終了したため、本年度は各大学の教務予算によって連携事業を実施した。

取組名称：音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

連携大学：本学（代表校）、昭和音楽大学、神戸女学院大学

② ACTプロジェクト

ACTプロジェクト（授業名：音楽キャリア実習）として、学生をホール、Jロビーコンサート、エリアコンサート、サイバーの4チームに編成し、音楽業務の実体験となる活動を行った。



サントリーホールレインボウ21（ホールチーム）



J館ロビーコンサートチーム

(5) 学生支援

① 東日本大震災(平成23年3月11日発生)により被災した学生の被害状況に応じて、引き続き学費の免除などの必要な措置を講じた。

② 学生相談室をはじめ医務室、学生支援課等において、日頃の悩みや問題を訴える学生が年々増加している。平成26年度に学生相談室を利用した人数は115名(学生の他、保護者、教職員を含む)延べ602件の面談及び連携活動を行った。

また学部・大学院生の全学年を対象にUPI (University Personality Inventory) 調査を実施。サポートが必要な学生を見極め、問題が深刻化する前に来談に繋ぐこととした。回収率91.0%、来談呼びかけ対象率22% (317名)

また「精神保健上治療を必要とする学生対応ガイドライン」を作成し、学生の精神的・身体的危機回避率を上げる努力をした。

③ 学業成績が優秀な学生・生徒、音楽活動に極めて優秀な成績を修めた学生・生徒に対し、奨学金制度を実施している。平成26年度は76名の学生・生徒に対し、奨学生として褒賞した。

④ 学生寮管理体制の充実化に向けて、現在の寮生活に適した「寮生活の心得」を改正した。また防災訓練・防犯講話を消防署、警察署の協力のもと実施した。

(6) キャリア支援

① 文化力発信プロジェクト (Spread-Project)

昨年度に引き続き、長野県信濃町をフィールドとして学生が地域活性化プログラムとして「企画」を立て、地元関係者と打ち合せ、「チラシ・プログラム」の作成、「予算書」の作成までを自らで行い、「赤毛のアン」をテーマとしたプログラム、「森の中」での演奏会、子供達向けのオペレッタ等、幅広い活動を行った。



宅老所でのミニコンサート



癒しの森の中の演奏会

② バイエルン州立青少年オーケストラ (bljo) との提携

本学は今年度 bljo との正式提携を行い、夏・冬(年2回)各8名以上の学生が、合宿と演奏旅行に正式参加することができることになった。(参加者はオーディションによる)今年度はバイエルン州政府の招聘により、ベルリンでの特別演奏会が開催された。



bljoメンバーとの集合写真



ズルツバッハ=ローゼンバルクでのコンサート風景

③ 就職特訓講座・就職基本講座

将来一流企業への就職を目指す学生に対し、1年間徹底的に特訓を行う。今年度36名の学生が受講した。

④ 各種資格試験等対策説明会

卒業後、社会に出た時に役立つ資格の試験対策説明会を開催。基本的な講座、7講座を全学年向けに開講した。

⑤ 企業説明会を開催

本学推薦企業による説明会を複数日にわたって実施した。企業の協力のもと、本学学生に向けた説明会が行われた。

⑥ 企業見学会を実施

平成26年7月31日(木)に、本学推薦企業でもある株式会社エイチワン亀山製作所の工場見学を行った。エイチワンは「ホンダ」関連企業であるとともに、現在世界15ヶ国に進出を果たし、優良な企業として成長している。



会議室での企業説明会

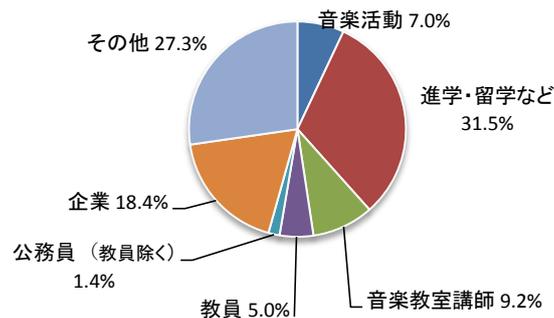


モノづくりの現場を实地見学

⑦ 卒業生の進路

国内外の大学院、音楽院や研修所などへの進学その他、演奏団体への就職、演奏活動、音楽教員、一般企業への就職等の進路を決めている。

<平成27年3月学部卒業生353名、及び平成26年9月学部卒業生6名の割合>



(7) 国際交流

① 短期留学

本学学部生及び大学院生を次のとおり派遣した。

- ・ リュエイユ=マルメゾン地方音楽院 (5月7日から3週間)
フルート 2名
- ・ モーツァルテウム国際サマー・アカデミー (7月・8月中の2週間)
声楽 3名
ピアノ 1名
弦楽器 3名 (ヴァイオリン)
管・打楽器 2名 (フルート)
- ・ ギルドホール音楽院 (10月20日から3週間)
ピアノ 2名
- ・ リスト音楽院 (10月2日から1ヶ月)
ピアノ 1名



モーツァルテウム国際サマー・アカデミー



リュエイユ=マルメゾン地方音楽院

② 留学奨学生特別英語クラス (5月第2週～7月第1週の水・金)

短期留学奨学生を対象とした英語の集中講座を開き、留学先での英語のレッス

ンに備えた。

③ 留学相談

留学希望者を対象に随時相談を受け、必要に応じて提出資料に関する指導等を行った。

④ その他

- ・4月：リスト音楽院の留学生担当者が来訪。リスト音楽院ピアノ1ヶ月コースが設置され、ピアノ専攻の学生の選択の幅が広がった。
- ・10月：ハンガリーオリンピック委員会会長及び東京オリンピック金メダリストが来訪。ミニコンサートを催し交流を図った。
- ・12月：中国音楽学院音楽教育専攻の教員が来訪。日本の音楽教育の説明やレッスン見学などを通して交流を図った。
- ・3月：東京音楽大学コンクールの副賞として、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院へ声楽の学生が交換留学に出発した。

(8) 大学院

① 大学院研究教育の体制の整備

平成25年7月1日に設置した博士課程設置準備室と従前の教務二課(大学院事務室)を再編統合して、平成26年4月1日付で大学院課を設置し、大学院における研究教育の支援体制の充実・強化を図った。

② 研究科委員会の開催

平成26年度は計12回開催

③ 平成27年度大学院科目等履修生の学生募集

大学院科目等履修生入学試験：平成27年2月20日～2月21日

<大学院博士課程>

① 博士課程の設置認可

文部科学省の認可により、平成26年4月1日に大学院音楽研究科博士後期課程を開設した。専攻等は以下の通り。音楽専攻(1専攻)、入学定員3名、収容定員9名、標準修業年限3年、学位：博士(音楽)、博士(音楽教育学)、博士(音楽学) 平成26年度は計8名(ピアノ4名、声楽2名、作曲1名、音楽学1名)の学生を受け入れた。

② 博士課程委員会の開催

博士後期課程における研究教育を推進し、円滑な運営を図るため、博士課程委員会を計11回開催し、当面の課題等について審議・検討を行った。

③ 平成27年度博士課程の学生募集

大学院博士課程入学試験：平成27年2月20日～2月22日

④ 博士共同研究A シンポジウム&コンサートの企画・実施

「博士共同研究A」の研究結果発表として、海外講師2名を招聘し、学生・教員によるシンポジウム&コンサートを平成26年12月6日(土)に実施。

⑤ 博士共同研究B

「博士共同研究B」において、教員と学生の事例研究をまとめた「研究報告書」を作成し、平成27年3月31日に発行した。

⑥ 博士リサイタル試験の実施

平成26年11月から平成27年3月にかけて、博士課程7名(音楽学分野を除く)による博士リサイタル試験を実施した。

⑦ リサーチ・アシスタント

平成26年度は、博士課程の学生3名をリサーチ・アシスタントとして採用した。
＜大学院修士課程＞

① 修士課程における研究教育の改善充実

修士課程における研究活動の改善充実を図るため、修士課程のアドミッション・ポリシー等を策定し、ホームページ等で公表した。また、平成26年10月17日開催の理事会において、「東京音楽大学大学院音楽研究科委員会規程」の一部改正が審議承認され、研究科委員会の下に修士課程の教育研究に関する「修士課程作業部会」の設置が認められた。この作業部会では、当面、修士課程における教育研究の改善充実に関する具体的事項について、審議検討の結果を研究科委員会に報告することになった。

② 平成27年度修士課程の学生募集

大学院修士課程入学試験：平成26年11月22日～11月24日

③ ティーチング・アシスタント

平成26年度は、修士課程の学生7名をティーチング・アシスタントとして採用した。

④ 平成26年度大学院オペラの研究発表を次のとおり実施した。

・平成26年10月10日(金) 本学100周年記念ホール

試演会：E. ヴォルフ＝フェラーリ「イル・カンピエッロ」

・平成26年10月13日(月・祝) 本学100周年記念ホール

試演会：W.A. モーツァルト「魔笛」抜粋 團伊玖磨「夕鶴」抜粋



「イル・カンピエッロ」



「魔笛」

5. ファカルティ・ディベロップメント (FD)

個々の教員のスキルアップを図るとともに、教員全体の組織的な教育力の向上・発展・成長を図るため、FD活動を推進している。

平成26年度は、前年度に引き続き、FD委員会による次の事業を実施した。

① 学生生活アンケートの実施

4月8日のガイダンス時に、新入生を除く全学生に対して、授業外学習時間やアルバイトに関することなどについてアンケートを行い、結果を冊子にまとめた。

② 授業Aアンケートの実施

昨年度は演習系の科目を中心にアンケートを行った。今年度は座学系の科目を中心に、472クラス分の授業を対象に授業Aアンケートとして前期科目は9月に、後期通年科目は12月に実施した。集計結果に分析を加わえて冊子にまとめ、対象となった授業担当教員へ配付した。

③ 大学院アンケートの実施

3月20日に大学院修了生を対象としてアンケートを行い、結果をパンフレットにまとめた。大学院アンケートでは、院生は学部生より主体的な学習を行っていることを考慮し、回答は選択肢ではなく自由記述のみにした。

④ FD研修会の実施

7月7日に「これからの東京音楽大学」と題して、大学の理念・目的を教職員に理

解してもらうための講座をシンポジウム形式で実施した。2月2日にも「これからの東京音楽大学Part2」として理事長、学長から話して頂いた。

⑤ FD通信の発行

「東京音大FD通信」を23号から26号まで4回発行し、全教職員へ配付し、FD意識の涵養に務めた。

6. 自己点検・評価

平成26年度は、平成25年度の東京音楽大学自己点検評価委員会規程の全面改定に基づき、自己点検・評価の新体制を整備した。改定により、教員とともに職員が委員を構成することとなり、大学運営組織と教育研究組織の協働による自己点検・評価が可能となった。新しい自己点検評価委員会規程に基づき、委員長、副委員長が学長から指名され、学長のリーダーシップに基づく、自己点検・評価をサポートする体制が整えられた。

また平成26年度は、平成27年度の公益財団法人日本高等教育評価機構による機関別認証評価の受審に向けて、自己点検評価委員会内に、同機構の基準に対応した作業グループを設け準備を進めた。

なお平成25年度に刊行された「自己点検評価書」は、学内の各委員会、事務局各課で共有され、平成26年度は指摘事項に対し改善に努めた。

7. 教員研究費

(1) 東京音楽大学教員（専任）個人研究費

- ① 申請教員数 90名（専任教員122名の74%）
- ② 申請総額 16,948,786円
- ③ 申請総額中の図書費総額 4,043,696円（申請総額の約24%）

(2) 文部科学省科学研究費基金

直接経費合計4,400,000円、 間接経費合計1,320,000円 総合計5,720,000円

<内訳>

- ① 本学教員が研究代表者であるもの（新規2件、継続3件）
直接経費小計 3,800,000円 間接経費小計 1,140,000 合計4,940,000円
- ② 本学教員が研究分担者であるもの（新規1件、継続2件）
直接経費小計 600,000円 間接経費小計 180,000 合計 780,000円

8. 地域連携

「豊島区と区内大学との連携・協働に関する包括協定」（平成19年11月19日）に基づき、豊島区と区内6大学の連携・協働による「としまコミュニティ大学」に参画し、区民の方々を対象とした授業、レッスン等を展開した。



としまコミュニティ大学



としまコミュニティ大学

また長野県信濃町、信濃町森林療法研究会「ひとときの会」との連携協定（平成24年2月22日）に基づき、シンフォニーオーケストラの合宿（9月4日～7日）を行う傍ら、学生達は黒姫山麓の癒しの森を体感した。合宿の最終日には、信濃町小中学校吹奏楽部も参加して、「第4回 癒しの森コンサート」を行い、お客様の手拍子で温かな雰囲気にも包まれた。



信濃町小中学校吹奏楽部との合同演奏



信濃町総合体育館にて

平成26年度の主な地域連携事業は以下のとおり。

- ① としまコミュニティ大学
- ② みないけコンサート（豊島区南池袋小学校主催）
- ③ 区民ひろば回遊音楽キャラバン（豊島区主催）
- ④ 第2回 としまおやこコンサート（東京商工会議所豊島支部青年部主催）
- ⑤ 第4回 癒しの森コンサート（長野県信濃町森林療法研究会と連携協定）
- ⑥ 豊島区庁舎ロビーコンサート（豊島区主催／昭和63年から実施）
- ⑦ Jロビーコンサート（平成21年度から豊島区後援）

9. 後援会、校友会等との連携

校友会支部主催演奏会により、本学と後援会、校友会との連携を強化し、絆と信頼を深め、交流・協力体制の一層の充実を図った。後援会からは、在学生が出演する校友会(卒業生の組織)全国各支部主催の演奏会に対し、助成を行っている。

10. 付属図書館

大学図書館において最も重要な使命は「教育支援」であり、初めての利用者には分かり易く(使い易く)、研究者には高度なサービスの提供できることを念頭に置き、運営・活動した。

- ・「研究紀要」第38号を12月に発行し、掲載論文は電子化し公開した。
- ・「ライブラリー・セミナー」の一環として、「パイプオルガン・レクチャー・コンサート」を実施し、豊島区の地域文化活動に貢献した。
- ・本学博士課程の学生が研究成果を発表する場として、「査読付き論文集」を刊行するための発行規程、執筆要領を整備した。

(1) 資料受入等

- ① 1年間の資料受入数

楽譜：	2,318点	和書：	1,201点	洋書：	403点
録音：	724点	映像：	71点	和・洋雑誌：	921点
- ② 図書館システムについて他社製品を含め比較検討した結果、現行システムのクラウド版を妥当とする結論に至った。
- ③ 貴重資料・マイクロ資料のデジタル化を進め、その保存・利用方法を検討した。
- ④ オンライン・データベースの選定基準、回数線、利用方法について検討した。
- ⑤ オーケストラ・ニッポニカから寄託された資料を整理し、館内閲覧及び演奏団体に貸出できる体制を整えた。ウェブ上に専用サイトを設け案内を発信。

(2) 情報サービス

- ① 4月に図書館利用ガイダンスを実施した。(学部生、院生、付属高校生対象)
- ② 教養科目「東京音楽大学入門講座」の一講座「図書館利用の仕方」において、資料検索・図書館活用の仕方をPCを使って指導した。
- ③ 論文を書く学生を対象に、OPACや各種データベースの利用の仕方、基本的な参考図書を紹介などを論文指導のゼミと連携して行った。
- ④ 院生によるライブラリーサポーターで資料検索や文献の使い方を指導した。
- ⑤ 図書館利用者や資料探索のコンシェルジュ的相談窓口を設置した。

- ⑥ 図書館1階においてテーマ展示を実施。各テーマの内容をウェブ上で発信した。
- ⑦ 非公開の本学専用リポジトリ・サイトを構築（国立情報学研究所提供のJAIRO-Cloudに参加）今後の運用について概要、目的、課題等を理事会に提出した。

11. 付属高等学校

平成26年度は、授業およびハワイ大学語学研修旅行、チャリティーコンサートをはじめとして、全ての行事を支障なく予定通り実施した。特に12月4日のチャリティーコンサートは、ゲストの先生方に出演して頂き、チケットもほぼ完売となり、盛況裏に終えることができた。

少子化・経済不況・公立高校授業料無償化等の影響を大きく受け「定員割れ」の状況になったが、一昨年48名、昨年61名、本年86名と入学生が増加してきた。

生徒募集については、関東地方中心に30ヶ所以上の楽器店音楽教室を訪問し、本校の説明を行った。広報活動で得た情報を基に、平成27年度に向けてピアノと作曲の両方に意欲をもつ受験生を含めての獲得が、今後の課題と考えている。受験生確保に向けてIT世代の受験生に対して、時代の変化に柔軟に対応できる若い世代の考えを取り入れる必要性があり、その第一歩としてHPのリニューアルに取り組み、4月より新しいHPをスタートした。

受験生に「選ばれる学校」となるためには、魅力ある教育内容をめざし、日々の教育の中で在校生が充実感と達成感を感じ、保護者が本校の教育に満足して頂けることが必要不可欠と考える。

同時に、より多様な形での音楽に関心のある受験生の受け皿として、専門性とバランスの中で裾野を広げていく斬新な取り組みが必要であり、総合コースのあり方の再検討を含め、改革が必要であると考えている。

12. 付属幼稚園

平成26年度は3年保育48名、2年保育8名、計56名の新入園児を迎え、年少48名、年中50名、年長36名の合計134名でスタートした。（入園考査は平成25年度に実施）総在園児数は前年度の在園児総数112名（平成25年5月1日現在）から22名の増加となり、運動会や演奏会、その他各種行事も盛況に終えることができた。

預かり保育の利用者も前年度以上に増え、全学年を合わせると一日平均約40名の利用があった。園児数増加のひとつに、預かり保育が大きく起因していることは明らかであるが、受け皿の課題も山積しており、整備が必要であると考えている。

“音楽大学の付属幼稚園”であるという最大の特色を生かした、保育の更なる充実をはかり、魅力あふれる幼稚園となるよう努めてゆきたい。

13. 付属音楽教室

4歳児～中学3年生を対象に、実技レッスンとソルフェージュ授業を2本柱とした総合的な音楽教育を行い、テクニックだけに偏らず、聴く人の心に響く音楽性を育てている。

試験や演奏会では同年代の生徒同士が互いに切磋琢磨することによって、教室全体の更なる向上を目指している。外部のコンクールでも多くの生徒が優秀な成績を収めている。

また付属幼稚園から付属高等学校への橋渡し役の第一歩として、付属幼稚園からの入室生徒のきめ細かい指導にあたり、優秀な生徒を付属高校へと繋げていくよう配慮している。

さらに、外部の優秀な生徒の獲得を目的として平成21年度から開設した「オープンシステムコース」では、入室生と同様の専門的なソルフェージュ授業に加え、一般のピアノ教室では得られない高度な音楽的指導を行った。このコースの受講者のうち、平成26年度末には1名が入室生へのコース変更をしており、着実に付属高校への進学希望者の獲得に繋がっている。

平成26年度に実施した音楽教室演奏会は次のとおり。

- ・ 学外演奏会：平成26年7月20日（日） トッパンホール
- ・ 学内演奏会：平成26年11月15日（土） 本学100周年記念ホール

14. 付属民族音楽研究所

主としてヨーロッパの音楽を研究、教育している本学に於いて、日本民族として音楽の世界における我々の位置を知る事は極めて重要である。

付属民族音楽研究所では、その見地から本学学生に対して、音楽の民族的多様性を知ってもらうと同時に、個々の音楽スタイルの固有性について、研究や資料を提供している。

(1) 学内授業展開

学内においては、全学年の学生に対して「ガムラン演奏実技・合奏クラス」「アジア音楽の理論と奏法」を開講し、日本伝統音楽・ガムラン音楽・インド音楽等多様な音楽に触れ、異文化音楽を理解する一助とした。

(2) 一般社会人向け事業展開

多様な音楽文化への興味を社会に広げることを目指し、「民族音楽等社会人特別講座(大学院と共催)」「ガムラン音楽教室」「民族楽器入門講座」を開講した。

(3) 公開講座

- ① 「アメリカとインド～サロドの楽しみ」
- ② 「伊福部昭の遺した楽器～明清楽器を聴く【その四】」

(4) 民族音楽研究

- ① 「研究紀要」発行（電子版も同時発行）
- ② フィールドワーク：ジャワ島(平成26年8月)、沖縄(平成27年3月)の現地調査

(5) 所有楽器・資料の活用

- ① 「明清楽器」一式を平成26年11月1日～12月23日まで鳥取県「因幡万葉資料館」に長期貸出し、4500人という資料館初の来館数を記録した。
- ② NHK Eテレ「伊福部昭の世界～ゴジラを生んだ作曲家の軌跡」に資料を提供した。
- ③ NHK Eテレ「日本の芸能・作曲家 伊福部昭の世界」に資料を提供した。
- ④ 図書館主催「生誕100年記念特別展示～五感で愉しむ伊福部昭」に資料提供した。
- ⑤ 学部の授業における見学会（平成26年10月 教職課程科目）
- ⑥ 日本民俗音楽学会東京大会の企画として当研究所でのレクチャーと講座見学

(6) ガムラン演奏コース受講者による演奏活動

- ① 国際大学（新潟）と本学の交流演奏会にガムランで参加（平成26年5月24日）

15. 財務報告

(1) 決算の特徴

平成26年度決算収支における帰属収入合計金額は、41億円(対前年度比1億9,000万円、4.5%減)となり、ここから基本金組入額4,600万円を控除した後の消費収入合計は、40億6,800万円であり、この結果、当年度消費収支差額は1億7,180万円の収入超過となった。従って、翌年度繰越消費収支差額は前年度消費収入超過額4億600万円を加算した結果、当年度消費収入超過額は5億7,800万円となった。

今年度の特徴としては、付属幼稚園の預り保育実施により、部門別で2,000万円超過となった。法人全体では入学者、および夏期・冬期受験講習会受講者が経年減少を続けている。

(2) 財務の概要（平成27年3月31日現在）

- ① 資金収支計算書
- ② 資金収支グラフ
- ③ 消費収支計算書
- ④ 消費収支グラフ
- ⑤ 貸借対照表
- ⑥ 主な財務比率と推移グラフ